靴の歴史散歩 ⑭⓪

皮革産業資料館　副館長　稲　川　　實

圧着靴が花開いた昭和30年代後半。合成底の普及も、その要因でした。

生産性は上がっても、供給過剰で売場は不振、という現象に見舞われたものの、間口一間、奥行き半間もないような店でしたから、それに応える品揃えができませんでした。私もこの頃、自分でメーカーを始めようと思っていた矢先でした。

23年から10年間、小売の店頭に立っていたことになりますが、お客様が欲しがる靴、売れる靴を作ろうと、自分で企画のようなこともしていました。

PX※1で手に入れた舶来物に薄紙を当て、デザインを写し取ることから始め、自己流で型紙も裁てるようになりました。

勤めは、後釜が見つかるまでと慰留され、営業にまわされましたが、これは叔父の恩情だったのでしょう。

25年の朝鮮動乱ぐらいまでは、九州の小売店でも、仕入れに上京し、手に提げて帰る程度の量があれば、交通費はもちろん宿泊代ぐらいは賄えたといいます。

宮本靴店は、北九州に強かったので、小倉や博多にはよく行きました。

日程は１週間から10日ぐらい。最終目的地までの切符を買って、順々に途中下車します。駅前の商人宿のような安宿に泊まり、貸し自転車を借り、得意先を一軒、一軒回る。汽車は夜行の３等。背中は痛いし、蒸気機関車だから朝起きると、煤（すす）で顔やワイシャツは真っ黒け。

そんな営業マン生活を２年やって、メーカーとして独立したのが35年。当時、小規模メーカーを四畳半メーカーといいましたが、それにも満たない三畳メーカーでした。

今※2、私は職場で若い人たちに囲まれています。彼らに靴づくりを教え、昔のことも話します。私が教えてもらったことを、若い世代に伝えている。それがとても嬉しく、そして感謝しています。

みなさん故人になられましたが、櫛原周一郎さん、櫛原光也さん、久保田九市さん、菅沼　操さん、大塚斌（あきら）さん、藤田武二さん、藤崎忠男さんありがとうございました。

35年連載の靴の歴史散歩、いつもご愛読いただきありがとうございました。140回の今号をもって、休筆とさせていただきます。

※１　アメリカ軍用語。軍隊内で飲食物、日用品などを売る店のこと。アメリカ軍の日本占領時代には、東京銀座の松屋や服部時計店を接収してPXとしていた。

※２　平成20年当時　靴メーカー　ホウジョウ・プランニング勤務。